
風の中のりん

彩夜仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の中のりん

【Zコード】

Z0433A

【作者名】

彩夜仁

【あらすじ】

屋上が好きな少年と、そこに突然現れた少女。二人は屋上という場所で互いに惹かれあっていくが・・・

僕は屋上が好きだ。
嫌な事があつた時、周りの喧騒を忘れない時、…そして彼女に会いたくなつた時。
僕は屋上に昇る。

屋上は僕にとって特別な場所だ。
地上より遙か高みにある、空に近い場所。
もしもあの空の上に天国というものがあるのなら、僕は屋上にいる間天国に一番近い場所で天使に会いに行つていた事になる。
少なくとも僕にとっては。

彼女と会つたのは1ヶ月程前の事だった。
僕はいつものように長い昼休みを屋上で過ごすと、屋上へと続く階段を昇つていた時であつた。

何気なく行く先を見ると屋上の入り口のドアが開いている。

「…え？」

ここに来る人は僕以外はいないと思っていたので、他人がここに来ている事を意味する痕跡を見つけ、僕は狼狽してしまつた。
僕は足音をたてないよう慎重に階段を登り切ると、半開きになつていた重い金属製ドアをそつと押した。
音も無くドアは屋上への入り口を開け放した。

そしてその先、青空と白い建造物の境に立つていたのは…
少女だった。

屋上の際にある手摺に手を置き、目の前に広がる空か、或いは街並みを（僕の位置からは彼女の目線までは把握する事が出来なかつた）眺めている。

時折屋上を吹き付ける風に倣つて彼女の長い髪は豊かにたなびいている。

僕はその彼女の姿に釘付けになつた。

実際、その時に僕がとつてていた行動は、音をたてて彼女に気付かれてしまわないように細心の注意を払うと共に、この瞬間が少しでも長く続くよう祈ることであった。

彼女はまだ僕の存在に気付いていないようだった。

ふと彼女に変化があった。

すうつと目を細め、その後彼女はひつそりと瞳を閉じた。

そして深呼吸をするように肩を一三上下させたかと思うと、手摺にあつた手を胸元で交差させて自分の肩を抱き締めた。

僕はその様子を見ながら彼女の行動…というか存在そのものが酷く現実味の無いものである事に気付いた。

まるで目を閉じればたちまち彼女の姿が消え去ってしまうかのように。

消え去ってしまう?

もしや彼女はここから飛び降りるつもりか?

僕は本気でそんな事を思い始めていた。

きっと僕はいつもとは余りに違う状況に出くわしてしまったために現実に虚像を持ち込んでしまったのだろう。

そして想像は確信へと変わる。

僕の行動は想像以上に素速かった。

「駄目だっ!」

僕は自分でも驚くくらいの大声を彼女に投げかけながら地面を蹴つていた。

初めて彼女が振り向いた。

初めて見る彼女の顔は微かに笑っていた。

しかし今の僕にはその表情の意味を気にする余裕がある筈も無かつた。

そのまま僕は彼女の身体を後ろから抱き留めていた。

抱き締めた瞬間、僕は安堵に似た充足感を感じた。

彼女は確かに存在していたんだ…と。

しかしそれと同時に、僕の中に存在していた幻影のような非現実は

まさにそのまま、幻影のようにかき消えてしまつていた。

結局、どういう事かと言えば、それは至極簡単な事だつた。

彼女はただ景色を見ていただけなのだ。

飛び降りる等と微塵も思つていない。

全ては僕の思い過ごしなのだ。

その事を自分の腕を通して伝わつてくる彼女の体温が教えてくれた。それと同時に名前も知らない女の子にいきなり抱きつくなど自分にしてしまつた行動の重大性に気付く僕。

僕は夢から醒めた微睡みを引きずるよつにそのままの体勢を保つていたが、それは数瞬の事であつた。

「えつ……あ……ごめん！」

飛び跳ねるよつに僕は彼女から離れると二メートル程間隔を空けて立つた。

「屋上に来たら君がいて……その何て言つが、すつごい綺麗で……つでも何だか君が消えそうな感じがして……気がついたら抱き締めてた」我ながら何を喋つているのか意味が分からなかつたが黙つているよりもましだと僕は思い直す。

「あ……ごめん……何言つてるのか分かんないよね……と、とにかくごめんなさい！」

慌てて頭を下げる僕を見て彼女は柔らかに微笑んだ。

逃げ水のように捉え所のない笑みであつた。

その笑みの意味は僕には分からなかつたが、何だか少しだけ許されたような感じがした。

彼女の名前は「りん」という。

平仮名かどうかは定かではないが、とかく僕は彼女の名前に漢字が似合わないと思つたのだ。

僕は勝手に彼女の柔らかい笑みと平仮名の朗らかさを重ね合わせてりんと呼んだ。

といつても面と向かつて名前を呼び捨てになど僕には出来ず、いつも僕は彼女の事を「君」と呼び、彼女は僕の事を「貴方」と呼んだ。

彼女は不思議な存在だった。

僕がいつ、どんな時間に屋上に赴いても必ず彼女はそこにいた。
まるでそこが自分の居場所であるかのように。

彼女とは色々な話をした。

しかしその殆どが僕からの話題で、彼女は屈託の無い笑みを浮かべながら相槌を打つだけであった。

僕は一度こんな事を聞いてみたことがあった。

「君の事が知りたい」

返ってきた言葉は意外なものであった。

「自分の事は何も知らないの」

その言葉の真意など僕には到底分からなかつたが、僕はその時心に誓つたのだった。

「彼女に質問してはいけない。僕はひたすら彼女に話をして彼女を笑わせれば良いんだ」

何故なら彼女が自分の事は何も知らないと言つた時の表情を僕は一度と見たくはなかつたから。

曇つた彼女の瞳は僕を惑わせ、悲痛としか呼べない彼女の顔は僕の心を締め付けた。

だから、僕は彼女と話をするんだ。

彼女は僕の話を聞いてくれる。

そして会話の合間に見せる彼女の笑顔が僕の憩いだった。

僕は彼女とかなり親密な関係にあつたと思う。

無論、僕の思い過ごしでなければだが。

けれどその親密な関係もかなり限定的にあつたと思う。

何しろ僕は彼女の名前以外何も知らなかつたのだから。

学年やクラスさえも僕は知らない。

僕と彼女の唯一の接点は、あの屋上。

あそこに行けば必ず彼女は僕を出迎えてくれる。
あの柔らかな笑みと共に。

それはさながらうるさい下界を抜け出して天界にいる天使を訪ねて

いるような錯覚を僕に与えた。

いや錯覚ではなく彼女は天使なのだ。
少なくとも僕にとっては。

彼女が笑う。

僕は彼女を見つめる。

「……」

沈黙してしまう。

ずっとこのままの距離で彼女の顔を見ていいたい……欲を言えばもう少し近くで。

そんな事を思つた時だった。

「……どうして黙っているの？」

彼女が不安に押し潰されそうな顔で聞いてくる。

「お願い。もつと貴方の事を教えて……話をして」

こんなに彼女の長い言葉を聞いた事がなかつた僕は面食らつていた。
それにしても彼女は僕に何を求めているのだろう？

僕は一度は禁じたあの行為を、してしまつていた。

「君は僕の事を知つて……それからどうするんだい？」

「……え？」

虚をつかれたような表情の彼女。

多分、きっと僕は我慢出来なかつたんだと思う。

君の事が知りたかったから。

何故なら僕は君の事を……好きになつていたから。

君が僕の事を知りたいように、僕も君の事が知りたいんだ。

その事を彼女に伝えると彼女はあの時と同じ痛々しい顔つきで俯いてしまつた。

「……『じめんなさい』

それが僕が聞いた彼女の最後の言葉だった。

その瞬間、眩い光が僕の目を刺した。

思わず目を閉じた僕の耳には微かな羽ばたく音と、あたたかな風。

僕が目を開けた時には彼女の姿はなかつた。

そして彼女のいた場所には一枚の真っ白な羽根が置かれていた。

僕はそれを手に取つてみる。

まだあたたかみのあるその羽根は、彼女のものだった。

それは僕の中の確信だった。

僕は天国に一番近い場所で天使と会話を楽しんだのだ。

しかし僕にとつてそれはどうでも良い事であった。

僕にとって彼女は彼女、それ以外なにものでもないのだから。きつと僕は幸せだったんだろう。

そして彼女も。

羽根と共に残された涙の跡がそれを物語つていた。

僕は彼女を捕まえる事が出来なかつた。

彼女の身体に触れたのは、最初に出会つた時のあの抱擁だけであつた。

最初で最後の触れ合い。

でも僕はそれ以上求めはしなかつた。

彼女と話することで僕は満たされていたのである。

そうして僕は今日も屋上へ昇る。

：彼女と話をするために。

青空を見上げた僕は、風の中にいる彼女に向かつて話をする。今度は彼女の事も沢山聞いた。

僕らは数え切れない程の話をした。

：そして僕は決心した。

この事をずっと忘れないように、心に留めていられるように、この物語を書く事を。

今僕は筆を置こうとしている。

もうこの作品のタイトルは決まつていてる。

「風の中のりん」

君を、忘れない

(後書き)

執筆時間は僅か一時間（汗）

電車の中で携帯に打ち込みました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0433a/>

風の中のりん

2010年10月20日19時24分発行